HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ある歴史家の軌跡 ： A・A・ジミーンとソヴェト中世史学
Author(s)	栗生沢, 猛夫
Citation	西洋史論集, 4, 82-111
Issue Date	2001-03-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37444
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_82-111.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ある歴史家の軌跡
——A・A・ジミーンとソヴェト中世史学——

栗生沢猛夫

はじめに

ソヴェト連邦が崩壊してはや十年近くになる。ソヴェト体制の成立にともない創出され、徐々に形成されたソヴェト歴史学はその独創性のゆえに世界の歴史学界において注目され、大きな影響を与えてきた。それは我が国においても、とくに第二次世界大戦後に盛んに紹介され、様々な面で強いインパクトを与えた。日本を含む非社会主義圏の歴史学界がソヴェト史学の成果を必ずしも全面的に、また無批判で受け入れたわけではなかったが、ソヴェトの歴史学研究が非ソヴェト圏においても大きな意味をもったことは疑うべくもない(1)。

ソ連邦の崩壊とともにかの地における歴史学界を取り巻く思想的・精神的状況は激変した。それを一言で表現することは難しいが、マルクス・レーニン主義また社会主義の権威の失墜、価値観の激変・多様化、思想・主義・信条におけるほとんどカオティックな状況の現出、そしてあからさまな民族・愛国主義的傾向の出現・増大などはただちに指摘できる。歴史学界もこうした影響を受けて、制度的に、また研究の方法と思想的動機づけ、そしてその方向性において、混迷を極めるにいたったといってよい。もっともマルクス主義的歴史観（史的唯物論）が多くの歴史家によって少なくとも金科玉条の方法的根拠であることを止めた今となっては、ロシアにおいても今後は世界の他の主要な国々におけると同様の、多様な方法と思想的裏付けのもとに多面的な研究が進められていくであろうことは想像できよう。そろそろソヴェト史学のたどって来た道を振り返って考えてみる時期が来ているといえるかもしれない。

もっとも本稿はソヴェト史学全体を論じようとするものではない。ある中世史家の軌跡をたどることによって、ソヴェト中世史学の抱えたいくつかの問題について、そしてそれ以上に、歴史家の研究の営みのなかに見いだされる普遍的な意味について、考えてみようとする一つの試みにすぎない。

注

（1）我が国におけるソヴェト歴史学に関する紹介は、ロシア・ソヴェト史に関する個々の研究が多かれ少なかれその影響を受けていることを考えれば、膨大なものになるが、まとまった形では（М・Н・ポクローフスキーの『ロシア史 I—Ⅲ』［石堂清倫・高田爾郎訳、勁草書房、一九七五—七六年、すでに戦前から岡田宗司訳で知られていた］や『ソビエト科学アカデミー版　世界史』［全三四冊、東京図書、一九五九—六七年］の翻訳、またソヴェトにおけるアジア的生産様式論争の紹介などを除けば）、鳥山成人「ソヴィエト歴史学について」（『思想』二七五号、一九四七）や田中陽児・米川哲夫訳編『ロシア史の時代区分（上）（下）』（有斐閣、昭和三三—三四年）（とくに下巻に付された編者の解説）、また近年の和田春樹氏の諸論考を除けばそう多くはない。ただ最近土肥恒之『岐路に立つ歴史家たち—二十世紀ロシアの歴史学とその周辺』（山川出版社、二〇〇〇年）が現れた。

一　ソヴェト中世史学とА・А・ジミーン

ソヴェト期におけるロシア中世史研究を誰か一人の歴史家に代表させてまとめて考えるというのはほとんど不可能に近い。重要な研究者の名をあげればきりがない。Б・Д・グレコフ、С・В・バフルーシン、С・В・ユシコフ、М・Н・チホミーロフ、Л・В・チェレプニーンなどの名がただちにうかんでくるし、現在まだ活躍中の重要な歴史家のなかにも、Б・А・ルィバコーフ、В・Л・ヤーニン、Р・Г・スクルィンニコフ、И・Я・フロヤーノフなどがいる。またすでに帝政期に歴史家として名をはせながら革命をむかえ、その後様々な運命をたどった人々もいる（М・К・リュバーフスキー、А・С・ラッポ－ダニレフスキー、С・Ф・プラトーノフ、А・Е・プレスニャコーフ、С・Б・ヴェセローフスキーなど）。さらには外国に亡命した者も（G・ヴェルナツキー）、またロシア史研究者以外でもА・Я・グレーヴィチなどがいる。

このようななかで、アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ジミーン（一九二〇—一九八〇）をとりあげる理由は、一つには、かれはアカデミー会員でも学術功労者でもなかったが（そうならなかった理由はおそらく後述する事柄と関係ある）、疑いもなくそれに匹敵するすぐれた歴史家であったこと、[1]第二に、かれは現実の政治から比較的に自由でいられる中世史家ではあったけれども、歴史家としてその生きた時代の政治・文化的体制と正面から向きあうことを余儀なくされ、現にその状況のなかで歴史家として歩み続けたこと、第三に、かれの業績はとくにロシアではいまだ十分には評価され、位置づけられていないと考えられることである。本稿でジミーンの研究をしかるべく評価することができるとは考えていないが、そのための準備作業となれば幸いと願っている。[2]

さてジミーンはモスクワ大学でС・В・バフルーシン（В・О・クリュチェーフスキーの弟子である）のもとでロシア史を学ぶことによってそのロシア史研究者としての第一歩を歩み始めた（かれは戦争中にはタシケントに逃れ、中央アジア大学を卒業したが、バフルーシンらもここに疎開していたという）。グレコフ、チホミーロフにも指導を受けたと伝えられる。アカデミー歴史研究所の院生時代にも、バフルーシンの指導のもとに研究を続け、ヨシフォ・ヴォロコラームスキー修

道院の歴史（僧団の社会構成、土地所有、イデオロギー）についての論文でカンジダート号（欧米の博士号に相当）を取得した（一九四七年）[3]。それゆえかれはいわゆるモスクワ学派の伝統の中で育ったといえる。もっともかれがその伝統に忠実で典型的なモスクワ学徒であったかといえば、そうではない。

すなわち、ロシア史学史上、よくモスクワ学派とペテルブルグ／レニングラード学派を対比的に区別して述べられることがあるが（その際、前者はその広汎な、解釈的アプローチで［C・M・ソロヴィヨフ、クリュチェーフスキーら］、後者はより狭く焦点を設定する歴史・言語学的分析をもって知られる［B・Γ・ヴァシリエフスキー、プラトーノフら］のだが）、ジミーンはこのような意味ではモスクワ学派の歴史家とはいいがたいのである。確かにかれにも、ある意味では当然のことながら（少なくとも一九六〇年のイヴァン雷帝の改革に関するモノグラフィーの頃までは、そしてその後も多少は）解釈的、総合的、場合によっては図式的、ドグマ的なところもみられたが、しかしその研究の内容を仔細にみてみるならば、かれはそのキャリアの始めから、史料の発掘・批判的検討・公刊という活動また精緻な文献学的分析などにその努力の過半を注いでいることに気づくのである。かれのこの古文献学者としての側面にこそかれの歴史家としての生涯を理解する鍵があるようにみえる[4]。これについてはさらに後述する。

注

（1）一九六二年ジミーンはアカデミーの歴史学研究所、スラヴ学研究所、モスクワ国立歴史-古文書研究所（МГИАИ）の推薦、アカデミー会員チホミーロフ、ルィバコーフらの支持をうけて準会員に立候補したという。実際には選出されなかったが（その理由ははっきりしない。かれが党員でなかったことがひびいたのかもしれない。G・アレフの示唆はあるが、後述するこの直後の事態の急変と直接関係したかどうかは不明である）、いずれにせよこの時点までのジミーンがソヴェトの歴史家として順調な道を歩んでいたことをうかがわせる事実である。これについてはA.A.Формозовの解説文(Зимин,«Слово о полку Игореве»,c.96-103)およびAlefの一九九三年の文章またカシターノフ、チェルノバーエフのジミーン論（いずれも本節注（2））を参照。

（2）ジミーンの没後間もなく、かれを偲び、その業績を紹介する文章がいくつも発表された。そのうちとくに重要なのはС・М・カシターノフ(*ИСССР*,1980-6,c.152-157;*AE* за 1980 год (1981), c.357-358)とВ・Б・コブリン（*ИЗ*,т.105,1980,c.294-309）によるものである（また後者の没後に出た*Кобрин, Кому ты опасен, историк?* c.187-191はジミーンの人柄、仕事ぶり、仕事の抜群の早さと高い記憶力、権力にたいする恐れとの闘いなどについてエピソードを交えながら生き生きと伝えているのでそれも参考になる）。以下の本稿の記述も多くをこれらによっている。その他欧米でも多くの紹介の文章（obituary）が現れた。そのうちから若干を記すと、E.L.Keenan(*Kritika*,XVI-1(1980),pp.1-4);G.Alef(*Slavic Review*, 39-2 (1980), pp. 363-364);D. C. Waugh (*Russian Review*, 39-3 (1980), pp. 390-392);A. M. Kleimola (*Soviet Studies in History*, XX-2 (1981), pp. 3-7);H.Rüss(*Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*, 28-3 (1980),SS.479-480);W.Vodoff (*Revue des Études Slaves*, LIII-4 (1981), p. 627-631) また最近ではG.Alef(J.L.Wieczynski,ed.*The Modern Encyclopedia of Russian and Soviet History*,v.55(1998),pp.252-255)やВ・А・ムラヴィヨフが歴史家ジミーンについて新たに論じている（*Истор-*

ики России.с.165-175)。またこれも最近弟子のカシターノフらが改めてジミーンについて詳しく論じている。それはかれの生涯、研究の展開、その意義などについての貴重な情報を含んでいる（*С. М. Каштанов, А. А.Чернобаев, Александр Александрович Зимин.в: Историки России XVIII-XX веков, Вып.5-й,с.133-148*)。

(3) この論文は三〇年後にその主要部分が出版された（*Зимин, Крупная вотчина*)。この遅延の意味ははっきりしない。博士論文が出版されないことは、一般的に言えば、そう珍しいことではないが、ジミーンの場合は、おそらく修道院研究、それも単なる経済史研究の枠を越え、修道僧らの思想の点にまで踏み込んだ研究であったことが、そのすみやかな出版を困難にしたのではないかと思われる。

(4) ルリェーの指摘をみよ。*Я. С. Лурье, Россия Древняя и Россия Новая*, c.13-16.

二　ジミーンのロシア史研究

（一）モスクワ大公国　政治・社会史研究

ジミーンの古文献学者としての側面にふれる前に、かれのモスクワ国家史研究の主要な業績についてまずみておきたい。後半生に集中的になされたこの分野の仕事の方が一般によく知られ、注目されることが多いからである。

かれのこの面に関する六巻本の最初の巻（『イヴァン雷帝の諸改革』）が出されたのが一九六〇年であるから、かれがモスクワ大公国史の研究に正面から取り組んだのは、その一～二年前の一九五八年ごろから、亡くなるまでの二二年ほどということになる。（全六冊の出版が完了したのは没後一一年たった一九九一年である。[1]）研究と執筆の時期はかならずしも対象とする時代の順序通りではない。イヴァン雷帝期（在位一五三三～一五八四）の改革とオプリーチニナから始めて、ヴァシーリー三世治世（一五〇五～一五三三）、イヴァン三世治世（一四六二～一五〇五）の後半、フョードル及びボリス・ゴドノフ期（後者の即位まで、一五八四～一五九八）の順で研究を進め、最後のヴァシーリー二世期（一四二五～一四六二）の研究を終えたのは亡くなる直前の病床の上であったといわれる。おそらくかれのその時々の関心の所在に従って研究・執筆されたのであろう。[2] いずれにせよかれのモスクワ大公国史研究は、一三世紀末にモスクワが自立的な公国となって以来の全史をたどるものではなく（かれがもう少し生きていたらダニール公からヴァシーリー一世治世に至る初期モスクワ大公国史、またスムータ（動乱）以降の初期ロマノフ朝期をも叙述対象としたかもしれないが、それはもちろんわからない）、一四二五～一五九八年をカバーするにすぎない。ソロヴィヨフやクリュチェーフスキーなどに比べれば、決して広汎な時代とテーマに取り組んだとはいえないが、それでも十分に広い視野をもった研究者であるといえよう。[3]

六巻シリーズを全体としてみるときに気づくのは、著者自身が述べるように、二〇有余年のあいだに著者のモスクワ国家史にたいする見方（歴史観）も、その研究・叙述方法も大きく変化しているということである。[4] これは一つにはかれが最初からある構想に基づいて計画的に六冊の通史を執筆したわけではなかったことと関連しているが、それだけではなく、以下に記すように、途中で歴史家としてのかれをめぐる状況に大きな変化があったためであろうと思われる。

変化はまず第一に史料批判と史料解釈の方法の面に顕著である。ジミーンは没後六年して出版されたシリーズ第五巻（フョードル、ボリス・ゴドノフ期研究）の序文において、ヴァシーリー三世治世論の執筆（出版は一九七二年）の頃から、一五～一六世紀ロシア史へのかれの接近法は「プラグマティックな方法」になってきたと書いている。その意味（をかれ自身は説明していない）は編者（В・Б・コブリン、А・Л・ホロシュケーヴィチ）によって、総合と綿密な学問的分析との結合とか、歴史学によってなされたことの総合・普遍化また祖国史の多くの問題の入念な研究、さらに研究される時代の全ての事件・出来事に関する首尾一貫した記述とか解説されているが[5]、これではよく分からない。ここで言われているのは、おそらく、それまでのソヴェト史学に往々にして（というより強く）見られたような、図式主義、ドグマ主義、理論主義的な接近法をやめて、事実を丹念に拾い、つないでゆく手法をとるということのように思われる。確かに、かれの後期の研究には、一年一年、時には一日一日と、順を追って、出来事の連鎖を追い、個々の出来事が重要であるのかどうかにはあまり注意を払わず、出来事の生きた経過を、いわば年代記作者のように物語的、叙述的に語ることを目指しているようなところがあるが、それはこのような認識の結果であるように思われる。

モスクワ国家史の展開自体についての見解も大きく変化している。シリーズ第一作の雷帝の改革論の時には、かれはいわばソヴェト史学の伝統的立場に立っていた。つまり当時（一六世紀中頃）のロシアにおける最大の問題は世襲地（ヴォッチナ）と封地（ポメスチエ）、世襲領主・貴族層と封地領主・士族層の対立にあり、両者の対立関係こそが当時の政治社会史の主たる内容であり、雷帝の改革政府は後者と結んで前者と闘ったとする、ある意味では大変分かりやすい立場である。この立場は実は「貴族」を目の敵にしたイヴァン雷帝自身に発する側面があるのであるが、帝政末期にプラトーノフなどによって整合的な形にまとめられ、ソヴェト史家も異なる理由付けからではあれこの点ではそれを踏襲していたのである。ジミーンも一九六〇年時点までは基本的にはこの立場に立っていた。またその際かれは、世襲地が当時強まりつつあった商品・貨幣関係にたいする適応力の点で封地に劣り、その結果貴族層は没落しつつあったとする帝政期のС・Б・ロジェストヴェンスキーに発し、ソヴェトでも受け入れられていたテーゼを繰り返してもいた。順調に研究者の道を歩んでいたジミーンにはこの、時代と社会の状況を論理的に鮮明に解釈する理論的枠組を疑う理由も動機もなかったといえるかもしれない[6]。

もちろんここで誤解を防ぐために、ソヴェト史学に特徴的に現れていたもう一つの立場についても急いで記しておかなければならない。それは本格的にはジミーンの教師であったバフルーシンによって集大成されたものであるが、雷帝の改革は世襲領主・貴族層と封地領主・士族層とのあいだの妥協をはかったものとする「妥協説」の立場である。ジミーンの書もこの段階ではこの立場を推し進めるものであった。それゆえオプリーチニナなどに関する見解もこの段階では旧来のままに留まっていて、「妥協」的な改革の結果未解決のままに残された貴族層と士族層の対立の問題の根本的解決をはかったもの、つまり前者

の撲滅をはかったものとしていた。[7]

ただジミーンのこの著書もよく読めば、というより今から読み返してみれば、すでにこの段階でかれが公式的立場から離れることを予測させるような様々な観察・認識を示しているのであるが、[8]（たとえば具体的には、貴族会議のメンバーの分析から、改革期＝「選抜会議」支配期においてすら、貴族会議はアリストクラシー層の代表者＝諸公・貴族層から補充されていたと結論づけている点、また一五五六年の勤務に関する法令が領地面積に応じて貴族・士族層の軍事勤務の内容を厳密に定めたのみならず、軍内部におけるアリストクラシー層の役割を増大させる、あるいは少なくとも確認することになったことの指摘、さらに、中央集権国家の基本的メルクマールの一つである中央官庁制＝プリカース制の形成は一六世紀中葉になってようやく始まったことの指摘、そしてまた一五五〇年の士族層を押し上げようとしたとされるいわゆる「千人」改革の未遂の主張[9]など）それについてここでは立ちいらない。

以上のような立場に変化が現れたのが、シリーズ第二作のオプリーチニナ論（一九六四年）であった。ここでは以後のこの面での展開を詳しくたどることはできないが、大きな変化のポイントは、まず第一に、雷帝期の政治社会史を貴族対士族の対立でとらえることをやめていったこと、すなわち現実はこのような二項対立では捉えきれず、より複雑な様相を示していたこと（したがってオプリーチニナもこの図式から解釈することは正しくなく、それはロシア史のより古い時代からの懸案であった「分領制的分権化」удельная децентрализация あるいは「封建的分立」феодальная раздробленность の遺制、具体的にはスターリツキー分領公、ノヴゴロド、正教会にたいする闘いであったとみるべきこと[10]）、第二に、モスクワ国家の中央集権化はソヴェト史学で主張されているほど[11]には進展していなかったこと、中央集権化とモスクワ諸大公による領土の統一とは区別さるべきこと（後者は基本的には一五世紀末には完成していた）、それゆえ一六世紀までのモスクワ国家は中央集権国家ではなく、単一ないし統一国家にすぎなかったこと（一六世紀前半においては国家行政は宮廷機関を中心に行われており、諸地方は依然としてなかば自立的な性格を保持していたこと、中央行政機関・プリカースの形成は世紀後半をまたねばならなかったこと、封建貴族層が勢力を保持し、代官職などを手中にしてその影響力を強化しようとしていたこと、それゆえ雷帝幼少期のいわゆる「貴族支配」はけっして偶然の現象ではなく貴族諸家門が依然として強大な勢力をもっていたことの反映であったこと、等々）、中央集権化の道は長く緩慢で、それがなったのは一七世紀半ばであったこと（一九九一年の最終作［ヴァシーリー三世期の研究］では、ジミーンは「中央集権化」という言葉を――明らかにそうした傾向を示す諸改革について言及するときでも――全く使わなくなる。単に「単一権力」をめぐる闘争とか、中央国家機構の創設の始まりとか、国家の領域・行政的機構の再編とか、司法改革、全国家的貨幣鋳造の復活とか、個別的・具体的に語るのみである[12]）、第三に、歴史、つまり社会の前進的運動における階級闘争の指導的役割という考え方が次第に後景に退いていったこと、である。

第三の点についても若干説明すれば、ジミーンはこの点に関しては最初からきわめて熱心な「マルクス主義者」であったと言え、ときにはあまり重要な意味を持たないような地方の小さな民衆・農民の動きですら何か重大な闘争であるかのように記し、強調することもあったが（そしてかれに近い人々もかれのこの人民・民衆、抑圧された階級にたいする篤い同感の念についてはよくふれているのであるが[13]）、この点についても変化してきていることがうかがわれるのである。とくに最後の著書では階級闘争に触れることはなかった。あの時代（一五世紀前半の内戦期）は民衆にとってはきわめて困難な時代であったので、「階級」闘争（というか農民・都市ポサード民の種々の抗議活動）がないわけではなかったのにである。これはかれの認識が変ってきていることを物語っている。かれはこの著書ではもっぱら諸公とそれをとりまく貴族・側近、ドゥヴォール（「宮廷」）とよばれる諸公に直属する軍事勤務人層、そして時には都市民にも触れはするが、いずれにせよ直接内戦に関わり、諸公を支え、内戦に大きな力を振るった諸個人・諸勢力に注意を集中させているのである。「階級」闘争一般がそれだけで直接に政治そして歴史のあり方を規定することはない、あるいはあまりない、と考えるに至ったかのようである[14]。

変化という点ではさらに次の点をも付け加えておくべきかもしれない。それはかれは最初の雷帝改革論（一九六〇年）のときから政治史に大きな関心を払っていたといってよいが、それへの傾斜が後になればなるほど強まったようにみえるのである。雷帝の改革論のときには、その著書の副題は「社会・経済及び政治史概説」となっていたのが、オプリーチニナ論ではそれが消え、第三作（『近代の門口に立つロシア』、ヴァシーリー三世治世論）では副題は「政治史概説」となり、第四作（『一五～一六世紀交のロシア』、イヴァン三世治世後半研究）では「社会・政治史概説」と変っている。第五作（『恐るべき変動の前夜』、フョードル、ボリス・ゴドノフ論）、第六作（『岐路に立つ勇者』、ヴァシーリー二世治世論）ではそれぞれ「最初の農民戦争の諸前提」、「封建戦争」（後者の副題は編者によるもの。ジミーン自身は本文でこのソヴェト史学で一般的であった用語は用いていない）と具体的な事象が出され、上の傾向が定着している（第五作の場合、著者はそもそも書名を『「ボリス・ゴドノフの」権力への道』とするつもりであったと伝えられており、その場合政治史そのものであることがはっきりしてくる）。

このことは内容的にも裏付けられ、雷帝改革論では研究史の章に続いて（全八章のうち）二章にわたって経済構造の叙述がみられ、オプリーチニナ論でも、土地制度や封建制度の搾取・抑圧の強化に関する記述がみられる。ただし後者ではそれは後半部で、政治史的叙述のなかに組み込む形で行われている。それが第三作になると、経済史プロパーの記述はほとんど消え（全一六章のうちの一章に経済的興隆という個所がある）、第四作では社会・経済制度に関する章が再び現れるが（イヴァン三世治世のモスクワ国家の成長を表現するのに、これはもちろん欠かせないであろう）、第五、第六作ではもはや経済自体に関して触れることはまったくなくなるのである。

おそらくジミーンは歴史研究に経済史的分析が必要ないとはまった

く思っていなかったであろう。その重要性を否定する気持ちはまったくなかったと考えられる。ただ、経済史研究がソヴェト時代にあまりに形骸化していたこと、それと社会・政治史との具体的関連（下部構造と上部構造の関係！）が十分に問われなくなっていたこと、つまりソヴェト史学界における硬直的な経済史研究に倦むようになっていたと考えられるのである。かれはあるいは人間を規定する諸条件の研究よりは、人間そのものに関心を集中させるようになった、といえるかもしれない[18]。かれは最後には極端なほど、この人間の権力をめぐる政治闘争の分析に没頭するようになっていた。それは近年欧米の歴史学界に見られるような政治史（あるいは政治文化）への回帰ないしその復権というよりは、ソヴェト時代に最も軽んじられた側面、歴史の、そして人間行動のいわばもっとも原初的側面にかれは立ち帰り、第一歩から歴史研究のあり方を問い直そうとしたかのようにみえる。

これらの変化、ジミーンが次第にとるようになった立場、かれが最終的に到達したモスクワ国家観についての評価にはまだ時間がかかるように思われる。筆者はかれの変化の方向は相当程度理解できるように考えているが（たとえば、その貴族・士族対立論の止揚、中央集権国家論への批判など）、もちろん全面的にそうだというわけではない。たとえばかれはシリーズ全体を第三作に付したと同じタイトル（『近代の門口にたつロシア』）でまとめうると考えているが、それはどうであろうか。一四二五年から一五九八年までを同じ表題で特徴づけることはむずかしいのではなかろうか、と思われるのである。（領土拡大・統一を主要な課題としていた一五世紀末まで、つまりイヴァン三世までの時代といわば集権化を本格的に追求し始めたそれ以後の時期とは区別すべきであろう。少なくともイヴァン三世以前を直接近代との関連でみるのは困難であろう。）また、かれが最終作『岐路に立つ勇者』で提唱したような第二の道（アリテルナティーヴァ）―モスクワ（けっして交易路の中心に位置したわけでもなく、自然資源も多くなく、またその公はオルダーのカンによって任命され後押しされていた。またそこでは農民は農奴化されつつあった）にたいする北方中心の発達の道、すなわちユーリー・ドミートリエヴィチとドミトリー・シェミャーカ父子（かれらこそタタールと戦ったドミトリー・ドンスコイの路線を継承し、反中央・地方分権をではなく、モスクワ国家の集権化を目指していた）に率いられた北方および沿ヴォルガ諸都市、ガーリチ、ヴャトカ、ウスチュークなどの発達の道（そこでは商・手工業ポサード、製塩業等諸産業が発展し、自由な農民が存在した）［一六世紀に関するH・E・ノーソフの説を想起させる］―の提唱も、はたして説得力ある見解かどうか疑問である。（ただかれがここにいたって、はっきりとモスクワ中心史観を拒否し、モスクワの勝利の歴史的必然性論と手を切ろうとしていたことは評価されなければならないと思う。）

ともあれ、ジミーンは最後の二〇年間の精力的な研究活動を通じて、ソヴェト中世史学のかかえる問題点を痛烈に指摘し、それを多面的に問うアンチテーゼを出したことは否定できない。このソヴェト史学にたいする問い掛けは今後より真剣に検討され評価づけされる価値があると考えられる。

注

（1）以下にはこの六巻本を中心にこの項を書き進めるが、ジミーンのモスクワ政治史にかかわる研究はこのシリーズに限定されるわけではもちろんない。狭義の政治史とはいえないが、忘れることのできないのが宗教思想と密接に結びついた政治思想に関する研究である。カンジダート論文（ヨシフォーヴォロコラームスキー修道院研究）に発するヨシフ派研究がその一つであるが、さらにはまた一九五八年に出版された『И・С・ペレスヴェートフとその同時代人』（Зимин, *И.С.Пересветов и его современники*）もこの範疇に属す。その他モスクワの政治エリート層（分領公、諸公、ボヤーレ、士族、書記官等々）のプロソポグラフィー研究も重要である。その一つの結実が没後に刊行された『一五世紀後半から一六世紀最初の三分の一にいたるロシアにおけるボヤーレ貴族層の形成』（一九八八年、Зимин, *Формирование боярской аристократии*）である。これは十四―十六世紀のモスクワの上層貴族諸家門についての豊富な系譜学的情報を集約・分析したもので、モスクワ君主権と貴族エリート層との関係に関する根本的な研究となっている。それはС・Б・ヴェセローフスキーの『勤務人士地所有者階級史研究』（一九六九年）の続編とみなすことができる。これらもジミーンのモスクワ大公国史研究の重要な部分を占めていたといえる。

（2）六冊とは、出版年代順にあげれば、(1)*Реформы Ивана Грозного*,(2)*Опричнина Ивана Грозного*,(3)*Россия на пороге нового времени (Россия на подъеме)*, (4) *Россия на рубеже XV-XVI столетий (Возрожденная Россия)*,(5) *В канун грозных потрясений(Путь к власти)*, (6)*Витязь на распутье*である。括弧内はジミーン自身が考えていたタイトル、ないしかれが後に自身の著書を指して呼んだときのタイトル名である。そしてシリーズ全体をかれは最終的に Россия на пороге Нового времени（『新時代の門口に立つロシア』）と名付けようとしていた。カシターノフ、チェルノバーエフはこのシリーズを「編年（史）シリーズ」（Хронологическая серия）と呼んでいる。

（3）おそらくジミーンのようなあくまでも史料の網羅的・批判的分析を前提としての歴史叙述のスタイルからすれば、かつてのソロヴィヨフやクリュチェーフスキーのような通史の執筆はもはや不可能であったであろう。その意味でジミーンをかれらに比してスケールが小さかったとするのは正しくなかろう。ちなみにジミーンはクリュチェーフスキーを深く尊敬し、自らもそれに倣おうと考えていたことが伝えられている。ジミーンはソヴェト学界にクリュチェーフスキーを紹介する上で最も功績のあった学者であった。かれはクリュチェーフスキーについて少なくとも四編の論文を書いているが、重要なのはクリュチェーフスキーの著書の出版である。すなわちジミーンは一九五六～一九五九年のクリュチェーフスキー著作集（全八巻、モスクワ）の出版に際し、原著者のテクストを校訂し、印刷の学問的準備をなし、コメンタリーを書いているのである（В・А・アレクサンドロフと共に、またР・А・キレーエヴァの参加と共に）。かれはまた（Р・А・キレーエヴァと共に）クリュチェーフスキーの書簡・日記・警句・歴史思想集（一九六八年、モスクワ）等々も刊行している。こうしたこともあってВ・Б・コブリンは晩年のジミーンの叙述の文体をクリュチェーフスキーのそれに準え、その思想の広さにおいてもクリュチェーフスキーに並ぶものとしているのであろう。*ИЗ*,т.105, c.300-301;*Кобрин,Кому ты опасен, историк ?* c.190.またジミーンのクリュチェーフスキーにたいする傾倒ぶりについては、さらにD.C.Waugh,A.A.Zimin'sStudyof the Sources for Medieval and Early Modern Russian History,in:*Essays in Honor of Zimin*,pp.6-8を参照。（ソヴェト連邦ではジミーン没後の一九八七―九〇年にもВ・Л・ヤーニンの監修下にクリュチェーフスキーの著作集［全九巻］が刊行されているが、実際の編集作業に当ったのは先のアレクサンドロフやキレーエヴァであり、それにジミーン夫人で歴史家のВ・Г・ジミーナが新たに参加している。ジミーンの仕事は見事に受け継がれているわけである。）

（4）ジミーンのモスクワ国家史研究を全体として評価するに際しては、ジミーン記念論文集*Россия на путях централизации*,256-269頁に載ったコ

ブリン論文（В.Б.Кобрин, Новейшие труды о процессе централизации Русского государства）と雑誌『祖国史』に載ったパネヤフ論文（Панеях, Панорама историиРоссии XV-XVI веков А.А.Зимина）が参考になる。コブリン論文はジミーン記念論文集に掲載されたが、そのタイトルにジミーンの名が記されず（いうまでもなくコブリンの意志に反してであろう）、読んでみて始めてジミーンの業績の紹介論文とわかるようになっている。この論文集にはその他にも二編のもっぱらジミーンの研究を紹介する論文［エルモラーエフ／リトヴィン論文とオフチンニコフ論文、c. 269-272,c.273-280］が入っているが、それらのタイトルにもジミーンの名前は明記されていない。ジミーンに捧げられているはずの記念論文集自体がかれの名を付されずに出版されている（В・Т・パシュートの序文の末尾にジミーンに捧げられていることがさりげなく記されている）ことを思い合わせると、ジミーンが生前ソヴェト史学界でどのような扱い方をされていたのかが想像できる。これはWaugh を中心とする欧米（ポーランドを含む）の研究者たちがジミーン記念論集(*Essays in Honor of Zimin*)を編んだのと、対照的である。（おそらくソヴェトの歴史家で、もっぱら国外の研究者らの寄稿からなる論文集を献げられるという光栄にあずかったのは、外にはいないであろう。）

（5）*Зимин,В канун грозных потрясений*, c.6, 241

（6）ジミーンは一九五〇年にでた П・А・サディコフのオプリーチニナ論（Садиков, *Очерки по истории Опричнины*）にたいする書評（ВИ,1950-12,c.144-148）において、オプリーチニナが親士族的、進歩的政策であったことを説いていた。またかれはスターリン期のロシア史観の集大成ともいえる多巻本 *Очерки истории СССР* の Период феодализма. Конец XV в.-начало XVII в.M.1955 の巻の雷帝治世の個所などを執筆しているが（バフルーシンやサディコフと共著）、ここでも言うまでもなく、当時の公式的な図式のなかで論述している。後のオプリーチニナ論（一九六四年）につながる側面がみられないわけではなかったが。

（7）雷帝期における貴族層と士族層の間の「妥協説」をめぐる問題については、鳥山成人「イヴァン四世の改革の性格（I）、（II）」『スラヴ研究』5（1961）、6（1962）に詳しい。

（8）ここで想起されるのが、前掲鳥山論文（II）の末尾（23-24頁）における次の指摘である。「Зимин などにあっては、「妥協」説という枠の存在がすでに研究者にとってかえって桎梏化しているとみるべき面も客観的には現れているのであって…」この段階でのこうした指摘は著者の洞察力の鋭さを表している。

（9）この最後の点（「千人」改革）については拙稿「『千人書』について―イヴァン雷帝の一五五〇年一〇月の改革案をめぐって―」『スラヴ研究』43（1996）、1-31頁を参照。

（10）ジミーンのこの面での変化は以後さらに深められるが、これをさらに徹底化したのがコブリンであった（Кобрин, *Власть и собственность*）。コブリンのこの著書については Юрганов, Творческое наследие В.Б. Кобрина, c.141-143, さらに拙稿「ロシア中央集権国家の形成と貴族階級」『商学討究』（小樽商大）、36-4,1986年、1-25頁を参照されたい。

（11）モスクワ国家が基本的にイヴァン三世治世には「中央集権化」していたことを主張した最も基本的な研究はチェレプニーンの一九六〇年の著書である（Черепнин, *Образование*）。

（12）*Зимин, Витязь на распутье*. その後ジミーンに近い研究者の一人ホロシュケーヴィチになると、中央集権国家概念そのものを拒否するにいたる。かの女はこの概念の理論的不備を説き、それが現実をとらえるのに不適切であることを指摘する。またかの女によれば、この概念はスターリン期のモスクワ国家観を具現化したもので、国家（権力）を理想化する誤った考え方であるという（Хорошкевич, Опричнина и характер русского государства）。この傾向はさらに推し進められ、一九九三年のルリエー論文も一五世紀ロシアに関し、中央集権国家という語は用いずに、単に「ロシア国家の形成」と表現している。かれによれば、これまでの伝統的史学は（チェレプニーンなども含め）後代のモスクワの公式的年代記の記述にあまりに強く影響されてきたという。かれはこれに

たいしモスクワとは独立のそしてより早期の年代記の（たとえ断片的にしか残されていないとしても）記事を重視すべきことを説き（そしてこのような立場からジミーンの『岐路に立つ勇者』における試みを具体的な点については批判を加えつつも評価している）、一五世紀政治史を新たに書き直そうとしている（Пулье, Русь XV века）。（かれは没後に出たПулье, *Россия Древняя и Россия Новая* の第五、第六章（c.100-168）においても、一三―一四世紀のルーシ・キプチャク・カン国関係の歴史について、同様の試みを行っている。）

(13) たとえばコブリンのジミーン紹介論文*ИЗ*,т.105,с.296,303を参照。

(14) В・И・ブガーノフは、ジミーンの階級闘争への関心・注目は首尾一貫していたと考えていて（Бутанов, А.А.Зимин о социальных движениях; Его же, А.А.Зимин о народных движениях в феодальной России, в: Спорные вопросы отечественной истории, с.29-30）、かれのこの面での変化を認めていないが、本稿の筆者は上に記したような印象をもっている。

(15) コブリンは、ジミーンがしばしば人間とその運命を通じてのみ歴史が理解できると語っていたことを紹介し、ジミーンの多くの研究がこの歴史過程の主要な行為者としての人間に対する揺らぐことのない関心に発していることを指摘している。コブリン前掲論文*ИЗ*,т.105,с.298を参照。

(二) 古文献学者としてのジミーン

ジミーンがモスクワ大公国史に関するシリーズ最初の一冊を発表したのは一九六〇年、かれが四〇歳のときである。それまでかれがどういう研究をしていたのかといえば、もちろん目につくのは二年まえに発表された最初のモノグラフィー『И・С・ペレスヴェートフとその同時代人たち』、かれのドクトールスカヤ・ディセルターツィヤ（ドイツのハビリタツィオン論文にあたる）である。（かれのカンジダート論文の出版が遅れたことについては一章の注(3)で触れた。）かれは一九六〇年以前にも十分にすぐれた研究を行っていたといえるのであるが（さらにたとえば五〇年代にソヴェト史学の総力を結集して行われた多巻本『ソ連邦史概説』*Очерки истории СССР*や、同じく多巻本の『モスクワ史』への参加なども重要である）、もちろんそれだけではなかった。かれのペレスヴェートフ研究は、アメリカの研究者J.Afferica の作成したジミーンの研究業績リスト[1]によると、九九番目の業績である（生涯を通しての業績は三六九点、それに一九八三年初段階で未公刊の著書等が一三点あった）。つまりかれはそれまですでに九八点の研究業績をもっていたことになる。それらの多くは実は歴史研究というよりは、歴史史料の発掘、テクスト批判・分析、その編纂、公刊、すなわち古文献学ないし歴史補助科学に関わるものであった。具体的に見ていこう[2]。

ジミーンが研究を始めたころ、クリュチェーフスキーからバフルーシンへと伝わるモスクワ学派の歴史学研究の伝統はアカデミー歴史研究所やモスクワ大学だけではなく、一九三〇年に創設された「モスクワ国立歴史-文書研究所」（МГИАИ）においても継承されていた。いや、むしろ後者の方がバフルーシンの弟子などを教師にむかえ、史料研究という意味ではその伝統をよく保っていたといえるかもしれない。ジミーンは一九四七年（カンジダート論文を書き上げたころ）ここの講師となり（特別歴史諸科学講座 Кафедра специальных исторических дисциплин）、この研究所での研究と教育が（歴史研究所における

研究活動と並んで）かれのその後の活動の基本的部分を占める。（その後の経歴を簡単に記しておくと、一九五〇年ドツェント＝助教授、一九七〇年教授、一九七三年退職。それが健康上の理由か、それとも何か別の理由かは不明である。いずれにせよ、最後の段階ではかれは時間給で働くことを余儀なくされていたという。一九七二年には教育活動からも離れている。また一九四七年末からは歴史研究所、後のソ連邦史研究所研究員ともなっていた。）かれはここで八〇の学士論文дипломと一五のカンジダート論文、四博士論文の指導をしたといわれている（かれの指導の下で研究活動を続けることが、後述するような理由で、けっして容易でなく、かれの下を去る者もいたといわれる状況の下でである）[3]。熱心な教育家で、教科書を執筆し（三点、いずれも単著）、書評し（三件）、歴史補助科学の教育に関する報告をし、歴史教育の方法について論じている。おそらく歴史-文書研究所のなかでも活発な教師、研究者であったにちがいないと思われるのだが、奇妙なことに研究所の二五、四〇、五〇周年などの記念誌にはかれの名はほとんど登場しない[4]。二五周年時点ではまだ若手であったからであろうか。また四〇、五〇周年に関しては後述の『イーゴリ遠征物語』研究との関連からであろうか。いずれにせよ真摯な学問的良心と激しい論争家的態度で知られるかれが、周囲とときに緊張した関係をつくりだすこともありえたことは十分に考えられる。

かれはこの研究所で歴史補助科学部門に所属していたが、かれが入って間もなく（一九四八―四九年）、研究所は当時の歴史学界をおそった粛正の嵐に巻き込まれ、かれの部門もその形式主義的、ブルジョア客観主義的傾向（А・С・ラッポーダニレフスキーの方法の無批判的受容！というのがよく行われた非難であった）の故に批判を受けた。このとき著名な歴史家А・И・アンドレーエフやЛ・В・チェレプニーンらが攻撃され、研究所の教育はよりソヴェト時代（の文書）に重点をシフトし、政府にとって「信頼のおける」（が、必ずしも学問的である必要のない）アーキヴィストを養成するよう指示されたのであった。一九五三―五四年には歴史補助科学部門が再編され、おそらくはこれとの関連で、ジミーンは研究所の学術（専門）委員会に出席し、補助科学、とりわけ дипломатика（古文書学）の重要性を訴えたのであった。（しかし дипломатика はその後カリキュラムから外されたという）[5]。

一九五六年四月に研究所公文書業務理論と実践部門における討論会で、ジミーンは同部門研究員Е・М・タリマンの史料刊行の方法論に関する報告をとりあげ、同部門が責任をもつロシア古文献学 археография のコースの内容を厳しく批判している。ジミーンはここでタリマンらが帝政期ロシアのドイツ人歴史家А・Л・フォン・シュレーツァーの古ルーシ文献（原初年代記など）の研究の方法にたいする貢献を不当に軽視していることを批判したのであった。（ジミーンはこのときこの行動ゆえに研究所の指導部から逆に批判されている。）

丁度そのころ研究所では歴史史料の公刊・出版の方法をめぐって立場が分かれていたようである。公文書業務歴史と理論部門のスタッフを中心とする研究者たち（В・А・チェルヌィフや前述タリマンら）は、史料を専門家の狭い層の枠をこえて広汎な層の人々にもアクセス

可能なものとするべく、史料公刊に際しての強力な編集作業を主張した。テクストの「誤り」を正し、「現代化」することを主張し、それを「批判的」で、「進歩的」な方法と考えたのである。これにたいし、ジミーンらはタイプや時代の異なる史料には異なる編纂法が適用されなければならないことを主張した。かれにすれば、中世史料を現代語訳でなければ理解できないような、またその公刊のための経験の少ない者が専門家に指図することには我慢がならなかったものと思われる。この時には後に中世ロシア史料学の分野で指導的立場に立つことになるД・С・リハチョフも先の人々にたいし痛烈な批判を浴びせかけている。リハチョフとジミーンの間には史料批判とその公刊の方法をめぐって対立するところもあったが（とくにテクストの復元 реконструкция の問題をめぐってはそうであった）、基本的な立場についてはすぐれた学者として共通の認識があったといえよう（この点では後に、一九七〇年代に入ってから、А・Г・クジミンの年代記研究に対する批判が行われた際にも、同様であった。ジミーンはリハチョフ、チェレプニーン、ヤーニン、ルリエーらとともに、しかし独立に、クジミンの非歴史的手法を厳しく批判したのである[6]。ジミーンのこうした活動は後に（一九五九年）『古ルーシ諸文書の刊行方法』[7]となって結実したが、これはアメリカ合衆国の研究者D.C.Waughによれば、史料の取捨選択と刊行のための準備作業に関する基本的な情報と適切な助言に満ちた、いまだに乗り越えられることのないテクストであるという[8]。

ここでかれの初期の史料研究・公刊活動の主なものを列挙しておく。

一九四七年には既述の如く、かれのカンジダート論文が提出されているが、それとの関連でかれはそれに先立つ何年か前からヨシフォ－ヴォロコラームスキー修道院の関連文書を求めて精力的な探索を行っている。それはいくつもの史料集の刊行となって後に結実するが、その最初のものが、一九四八年の『一六世紀ヨシフォ・ヴォロコラームスキー修道院の鍵の書と借用書』（Книга ключей и Долговая книга）である。一九四七年にはさらに「ボロートニコフ蜂起の歴史によせて」К истории восстания Болотникова, *ИЗ*, 24が著されているが、ここにおいてもこの蜂起の時期のヨシフォ－ヴォロコラームスキー修道院関連の新史料の刊行が行われている。また一九四八年には「一六世紀初頭の諸公の遺言状」Княжеские духовные грамоты начала XVI века, *ИЗ*,27がでているが、これは後のチェレプニーン編のいわゆる*ДДГ*（*Духовные и Договорные грамоты великих и удельных князей XIV-XVI вв.*, М.Л., 1950,『一四―一六世紀諸大公及び分領公の遺言状並びに条約文書』）やС・Н・バルク編の『大ノヴゴロド及びプスコフの諸文書』(ГВНП,*Грамоты Великого Новгорода и Пскова*,М.-Л.,1949)所収の諸文書の成立年代に関する包括的な見直し・再吟味につながる作業であった。

一九五〇年には「一五―一六世紀における小年代記」Краткие летописцы XV-XVI вв., *ИА*,5を著したが、そこでもこれまで注目されてこなかったヴォロコラムスクに関係する小年代記を紹介し、後の年代記研究への足がかりを作っている。同年にはまた、年代記研究の大御所А・А・シャーフマトフには知られていたが、一九二〇年代に行方

が分からなくなっていた『ノヴゴロド第一年代記』のトロイツキー写本を、前モスクワ宗教アカデミー手稿コレクションのなかに発見し（А・А・ロモダノフスカヤと共に）、それを文献学的に詳細に検討した上で（А・Н・ナソーノフと共に）刊行している（*Троицкий список Новгородской первой летописи, Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов*, М.-Л.,1950, с.510-558, Подгот.текста, археогр.введение, совместно с А.Н.Насоновым）。さらにイヴァン雷帝期のエリート層の研究に欠かせない史料の刊行も同じ一九五〇年であった（*Тысячная книга 1550 г. и Дворовая тетрадь 50-х годов XVI в.* Подгот. к печати, предисловие, археогр. введение. М.-Л.）。

また一九五一年には、前年に刊行したトロイツキー写本に関する論文を書き（*О так называемом Троицком списке Новгородской первой летописи*,*ВИ*, 1951-2 (совместно с А.Н. Насоновым)）、翌一九五二年には、一四―一六世紀北東ルーシに関する社会経済史関係文書にヨシフォ・ヴォロコラームスキー修道院関係史料を刊行し（*Акты социально-экономической истории Северо-восточной Руси конца XIV-начала XVI в.*,т.1 Подгот.текста и археогр. коммент. М., (совместно с И.А. Голубцовым и Л.В. Черепниным)）、さらに一六四九年のいわゆる会議法典の史料に関する論文を執筆、また一二世紀のものとされる文書（いわゆるフセヴォロド・ムスチスラヴィチ公の行政文書）に関する批判的研究を著している。『ロシア法記念碑』（*ПРП, Памятники русского права*）第一巻（キエフ時代の法史関係史料集）の編集・刊行をほぼ一手に引き受けたのもこの年であった。

以下省略するが、ジミーンの歴史史料への並々ならぬ関心と注目はその研究活動の最初からの際立った特徴であることがわかる。とくに重要なのは上にも一部記したが、かれが『ロシア法記念碑』ПРП（全八巻、一九五二～一九六三年）の第一～第五巻までの実質的な編纂者の一人であったことである（составитель, 特に最初の二巻は一人で、次の二巻についても相当部分を編纂・刊行している。監修はユシコフであった）。これとの関連で次のようなエピソードが知られている[9]。『法記念碑』最初の二巻の出版の後の一九五三年一〇月、モスクワ法学研究所国家・法史部門において、この二冊に関する討議・批判集会が開かれた。法学者が刊行事業から外されていることにたいする不満があったようである。ジミーンは参加を要請されず、翌一九五四年に『ソヴェト国家と法』第一号誌上の書評に付された報告によりこのことを知ったという。ジミーンはただちに編集部へ書簡を送り（同誌一九五五年第一号に掲載）、かれに答弁する機会を与えなかったことにたいし抗議するとともに、かれへの批判にたいする反批判を行った。批判者の一人И・Д・マルティセーヴィチはジミーンの刊行の直前の一九五一年に『プスコフ裁判文書』を刊行していた。しかしそれは底本の誤りにたいする訂正も、異本との違いやテクストの欠損にたいする指摘もない、学問的に問題のあるものであった。このたびのジミーンの刊行はそれを批判しつつ他の刊本や研究をも参照して、周到な検討と準備の上で行われたものであったのである。（しかし法学研究所の意見の表明は一定の効果があったようで、その後『法記念碑』の第六巻、第八巻は法学研究所の国家・法史部門の責任者К・А・ソ

フロネンコの責任編集のもとに現れることとなった。）

『法記念碑』第一巻においてジミーンはロシア最古の法典『ルースカヤ・プラウダ』のテクストをも刊行している（三つの版ー簡素本、敷延本、簡略本ーのテクスト、現代語訳、法史的解説、テクスト論的コメント、一六〇頁余の仕事である）。それは主にチホミーロフとユシコフの研究を念頭におき、特に前者と批判的に対峙しつつなされた研究であった。ジミーンの『ルースカヤ・プラウダ』研究はその後も続けられ、一九九九年、没後一九年にして初めてその全貌が明らかにされた[10]。

その他『法記念碑』第一巻には教会に与えられた諸文書（ウラジーミル、ヤロスラフ両大公の教会への特権状など）が含まれている。この分野の仕事はその後かれの示唆もあり、Я・Н・シチャーポフが研究を続行することになる。

さらに一九五〇年には、上述のノヴゴロド第一年代記トロイツキー写本の発見・刊行に加えて『ヨアサフ年代記』Иоасафовская летопись（ニコン年代記の史料。これも一九二〇年代に失われていた）の発見がある（刊行は一九五七年）。ジミーンは自らの年代記研究においてA・A・シャーフマトフの伝統に連なろうとしており、その継承者の一人とみることができる。

また一九五〇年代初にジミーンは一六世紀にいたる諸公の全ての遺言状と条約（五四点）の成立・締結年代に関する通説の見直しという「極めてアムビシャスな課題」（Waugh）に着手している。おそらく上掲一九四八年論文執筆の際にその必要性を痛感したのであろう。チェレプニーンの大著（*Русские феодальные архивы*, I, II, M.-Л., 1948, M., 1951及び上掲史料集ДДГ, 1950）の存在にもかかわらず、あえてかれ自らがこれらの史料の史料学的検討を行い、チェレプニーンらの研究の吟味を行おうとしたのである。かれはその成果を一九五六、一九五八年に論文の形でまとめている[11]。他方チェレプニーンはその一九六〇年のモノグラフィー（Черепнин, *Образование*）でジミーンの上掲諸文書の成立年代に関する新たな提案には注意を払わず、一九七二年になってやっと、ジミーンは自分の論拠をあまりにカテゴリカルに理解している、と遺憾の意を表明したに留まった[12]。この時代の史料研究上の諸問題の解決が容易でないことを物語る一コマであろうと思う。

いずれにせよジミーンの以上の様な、「そのキャリアの初期の時代における手稿本保存所［文書館・修道院等――引用者］の探索における信じがたいほどのエネルギー」（Waugh）に伴われた探求は、古ルーシに知られている事実上すべての史料を自らの手で調べ、その原初的形態、成立年代、著者・編者・作成者、伝承過程、写本状況、真贋などについて明らかにしたいとするかれの歴史家としてのすさまじい意志を示しているものと言える。かれの文献学者、史料批判の研究者としての側面はその生涯の最後まで衰えることはなかった。否、むしろますます強まっていったといってよい[13]。かれはその意味では、ソヴェト史学にあって孤高を保ったС・Б・ヴェセローフスキーの遺産を最もよく受け継いだものといえるかもしれない（史料への沈潜はもちろん、とりわけ系譜・系図学、プロソポグラフィーの分野においてそうである）。Waughがその長大なジミーン論において、その冒頭に史料

研究の重要性とその意義の永続性について説いたヴェセローフスキーの文章を引用しているのは象徴的である。[14] また典型的なレニングラード学派であったЯ・С・ルリエーが若きジミーンのうちにいわゆるモスクワ学派らしくない特徴を認め、生涯深く尊敬し、交友を続けたのも、まさにジミーンのこうした側面ゆえのことであった。[15]

史料の重視、とりわけ現存史料全部の調査研究の主張――かれは、たとえば今取り組んでいる何らかのテーマに関する「史料の選択［収集］」という言い方を嫌っていた（コブリン）――に表れた史料研究者としてのかれの徹底性は、さらに一九六〇年代初頭に行われたレニングラードの著名な歴史家Н・Е・ノーソフとの方法論論争にも現れている。これはジミーンの弟子С・М・カシターノフのノーソフ批判に端を発し、それにジミーンが加わって主にジミーンとノーソフの間で行われたものである。[16] 次項に述べる『イーゴリ遠征物語』研究への着手も、何よりもかれのこの歴史史料への探求心・執着心、また史料とその批判的利用に基づく歴史研究への信念に発していると考えることができる。

注

（1）*Essays in Honor of Zimin*, pp. 59-88.

（2）ジミーンの古文献学（歴史補助科学）研究の全貌については、Waugh, Zimin's Study, in: *Essays in Honor of Zimin*とПанеях, Вспомогательные исторические дисциплины がよくまとまっている。

（3）Лурье, Об Зимине, c. 331.

（4）Waugh, Zimin's Study.

（5）このくんの事情はWaugh, Zimin's Study, p. 12-13 に詳しい。

（6）Зимин, О методике изучения древнерусского летописания.

（7）Зимин, *Методика издания древнерусских актов.*

（8）Waugh, Zimin's Study, p. 20.

（9）Waugh, Zimin,'s Study, p. 27-28.

（10）Зимин, *Правда Русская.*

（11）А. А. Зимин, О хронологии договорных грамот Великого Новгорода с князьями XIII-XV вв., *ИИ*, вып. 5(1956), c. 300-327; Его же, О хронологии духовных и договорных грамот великих и удельных князей XIV-XV вв., *ИИ*, вып. 6(1958), c. 275-324.

（12）Л. В. Черепнин, Публикации русских актов XIV-XVI вв., осуществленные в советское время, *АЕ* за 1971 год(1972), c. 42-43.

（13）ただし史料刊行については事情は若干異なる。パネヤフ Панеях, Вспомогательные исторические дисциплины, c. 108 によれば、ジミーンはその生涯で四〇編を越える歴史史料を刊行したが［うち一〇編は書物の形で］、史料刊行作業の多くは一九六〇年までのものであるという。まさにかれは若いころに史料研究とその編纂・刊行の活動を活発に行っていたのである。（ただ晩年にもこの種の仕事がなかったわけではないことは言うまでもない。たとえばГосударственный архив России『十六世紀ロシアの国家文書』がそうであるが、これはいわゆるツァーリ文書目録のテクストを刊行し、さらに膨大なコメンタリーを付して十六世紀国家文書の内容の復元を試み、あわせて文書の形成史をたどった画期的な業績である。ただしロータプリント版で、発行部数は三五〇部であった。序文の著者はチェレプニーン。）

（14）Waugh, Zimin's Study, p. 1-3; コブリンによれば、ジミーンはいつもヴェセローフスキーの仕事に驚嘆し、「我が国にも大学者 классики は多い。しかし歴史家といえるのは唯一人、ステパン・ボリーソヴィチ［ヴェセローフスキー］だけだ」といっていたという。*ИЗ*, т. 105, c. 298; Кобрин, *Кому ты опасен, историк?* c. 190.

（15）Лурье, Об Зимине, c. 329. なおルリエー没後にでた論文集（Лурье,

Россия Древняя и Россия Новая, с.7-8）の序文（著者名は挙げられていない）によれば、レニングラードのルリエーとモスクワのジミーンは頻繁に手紙を書きあい、ときには訪問しあって盛んに論争していたという。両者の間に交わされた書簡は八〇〇通に及んだという。なおルリエーにはジミーンを論じたさらに別の論文も知られているが、筆者はみていない（Я.С.Лурье,Из воспоминаний об Александре Александровиче Зимине, *Одиссей, Человек в истории*. М.,1994,с.194-208）。

（16）その際ジミーンは次のような原則を主張した。まず史料の選択的利用の拒否。かれはアルヒーフ史料の全面的検討を求めた。次に、一定種類の文書のどれだけが今日まで伝えられ、分析の対象となっているのか、研究者が扱っている史料はかつて存在したものの偶然的な部分であるのか、それとも主要部分であるのか確定すること、を求めた。さらに、もしそれが主要部分であるならば（かれはたとえば土地関連文書についてまさにこうした結論に達している）、それらに統計的分析を加えつつ、本来の古文書学的形式分析的手法を適用すべきであると説いた。詳しくはWaugh, Zimin's Study,pp.10-11,50-51さらにパネヤフ Панеях, Вспомогательные исторические дисциплины, с.126を参照。

三　ソヴェト史学界におけるジミーン
――その『イーゴリ遠征物語』研究

（一）A・マゾンの『イーゴリ遠征物語』研究とソヴェト学界による批判[1]

歴史研究者として順風満帆であったジミーンをロシアが誇る中世軍記物語『イーゴリ遠征物語』（以下『物語』と略記する）に関する本格的な研究へと向かわせたきっかけは、一九六二年のアカデミー・ロシア文学研究所古ルーシ文学部門による論文集『イーゴリ遠征物語――十二世紀の記念碑的文献』《*Слово о полку Игореве*》-*памятник X11века*. Сб. статей,. М.-Л.1962の出版であったようにみえる。本書はリハチョフ、В・П・アドリアノーヴァ-ペレッツ、Н・К・グッズィー、Ю・М・ロートマンら、ソヴェトの指導的文献学者や文学者らが執筆し、フランスの学者アンドレ・マゾンの『物語』偽作説（A. Mazon, Le Slovo d'Igor,Paris,1940. 一八世紀の作品とする）にたいする徹底的批判をもくろんだものであった。

（二）ジミーンの研究、一九六三年二月二七日ロシア文学研究所古ルーシ文学部門（レニングラード）における報告

ジミーンはこの書におけるソヴェトの指導的学者らの史料の取扱い、学問的議論のあり方に不満だったのであろうか（カシターノフ、チェルノバーエフ論文、一四一頁）、自ら研究に乗り出す。問題の核心は『物語』とクリコヴォの戦い（一三八〇年）をうたいあげた『ザドーンシチナ』との関係であった。両者に類似の個所が存在するからである。ジミーンは両者間の影響関係を、大多数の研究者の場合とは逆に、後者から前者へというように理解する。従って『物語』は『ザドーンシチナ』より後の作品ということになる。しかもかれは『物語』が類似しているのは『ザドーンシチナ』の初期の写本ではなく、後期（一七世紀）の写本であることを主張する。そして結論的に『物語』は一八世紀末のスパソ-ヤロスラーフスキー修道院掌院ヨイリ・ヴィソーフスキーの作とする。これをジミーンが最初に広く明らかにしたのが

何時かは不明である。[2] いずれにせよ初めて公式的に発表したのは上記の研究集会であった。

もちろんロシア・ソヴェトでもそれまで『物語』の真作性を疑ったものは作家にも学者にも少なくなかった。К・С・アクサーコフ、И・А・ゴンチャローフ、Л・Н・トルストイなどの作家たち、М・Т・カチェノーフスキー、О・И・センコーフスキーなどの学者たちがそれにたいし疑念を表明していた。А・А・シャーフマトフ、М・И・ウスペンスキー、В・И・マールィシェフらも慎重な態度をとっていた。（ポーランド系の歴史家Н・パシュキェヴィチなども作品の非歴史性を指摘し、わが国でも木崎良平氏がこれをうけて偽作説に傾いている。）しかしそれまでこれをおおっぴらに、しかも全面的、徹底的、持続的に主張した者はいなかった。（言うまでもなく、国家・民族の誇り高い芸術作品で、いわば「信仰」の対象となっていたこの作品をいわば貶めることによって、あたかも反愛国的・売国的なことをする、つまいわばりそう非難されることにたいする恐れがあった。）

一九六三年二月二七日レニングラードにおける研究集会には一五〇人以上が出席した。セクションの長であるリハチョフは病気で欠席し、代わってИ・П・エリョーミンが会を主宰した。ジミーンの報告は三時間近く続いた。多くの質問が出されたが、討論はほとんどなされなかったという。（複雑なテクスト分析や多くの点についての詳細にわたる検討を聴いただけで理解することは困難であったのであろう。）エリョーミンは衝撃をうけた、と語った。報告を真剣に検討し議論できるように、出版されるべきだという意見が出された。

報告後ジミーンはチホミーロフやチェレプニーンら一連の学者を訪ねてかれの見解を説明し出版への助力を要請したが、好意的な返事はえられなかった。言語学者・文学者のアカデミー会員Б・Б・ヴィノグラードフは関心を示し、ジミーンに直接四度も会ってその見解を聴き、理解を示したが、目立った動きは示さなかった。学者によっては会うのを避ける者もでてきた。ただ若い歴史家や文献学者のなかには関心を示し、調査の協力を申し出る者もいた。

一方学界指導層は不安を感じ、何らかの措置をとる必要があるという結論に達した。一九六三年三月一二日ジミーンはアカデミー会員で歴史部門の書記Е・М・ジューコフに呼び出された。かれは許可なしに報告したことを叱責され、アカデミー副総裁、党中央委員会委員П・Н・フェドセーエフからの、これ以上いかなる報告をも行わないように、という要請を伝えた。同様の譴責は歴史研究所所長Б・М・フヴァストフからもなされた。

問題を何とかうやむやにすべきことがはかられた。ジミーンにはレニングラード報告の要点を三ページにまとめるよう提案がなされた。それを論駁するチホミーロフの論文とともに『歴史の諸問題』誌に掲載されるという。ジミーンはこれでかれの問題提起は葬られると考え、これを拒否した。（チホミーロフ論文はその没後に発表された。[3]）

ジミーンの見解を検討し審議する集会を開くという案が、いつどのようにして決定されたかはよくわからない。おそらくはかれの報告は内外に知られており（報告集会にはレニングラードで学んでいた外国人留学生も出席していた）、これを隠すことはもはやできないと考え

られたのであろう。

双方の側で準備が活発になされた。ロシア文学研究所ではリハチョフがジミーン説を論駁すべく研究員を総動員して『ザドーンシチナ』研究に向かわせた。[4] ジミーンもその研究をまとめ、一九六三年七月九日アカデミー歴史部門に原稿が完成したことを伝えた。歴史部門では七月から九月にかけての四度の審議によって、原稿をロータプリント（オフセット印刷）で一〇〇部印刷し、非公開集会でこれについて討議することが決定された。ジミーンには一五名（後に二〇名に増やされる）の参加者を招待することが認められた。検討会に先立ってジミーンはタイプ原稿の写しを同僚らに読んでもらい、意見を求めた。八ヶ月の間に一〇〇人もの人々がこれを読んだという（モスクワの中世史家のほとんど、その他レニングラードの歴史家も、また文献学者、言語学者、フォークロア研究者、芸術学者、考古学者、作家など）。その半数が意見を寄せた。必ずしも賛成するものではなかったが、全ての者がその出版を主張した。

一九六四年初めロータプリント版ができ上がった（Зимин,《Слово о полку Игореве》, Источники.Время создания.Автор. 三冊、総計六六一頁。印刷部数は示されず。九九部から二〇〇部まで論者によって様々な数字があげられている。おそらくは一五〇部ないしそれ以上が印刷されたものと思われる。多くの論者は一〇一部とする。「公務使用用」の印を捺され、通し番号が付され、受領証と引換えに渡されたという）。歴史部門の学術書記Ю・В・ブロムレイはルィバコーフ、リハチョフと相談して、参加者の人選にかかった。それは一〇〇人以上になった。

一月ジミーンはA・マゾンから手紙を受け取った。ジミーンの研究内容を知りたい、そしてそれを西欧で出版したいという内容であった。ジミーンはロシアでの出版を希望するとしてこれを断った。

三月四日党中央委員会イデオロギー委員会議長Л・Ф・イリーチェフがジミーンの著作を一部提出するよう伝えてくる。三月一六日ジミーンはアカデミー副総裁フェドセーエフに呼び出される。ジューコフ、フヴォストフ、ルィバコーフ、ブロムレイその他かれの知らない者たちがいた。検討会は行われること、しかし本の出版はなされないことが伝えられた。

(三) 一九六四年五月四―六日アカデミー歴史部門における検討会

検討会は五月四―六日アカデミー歴史部門講堂で行われた。これに先立ってチホミーロフはジューコフに書簡を送り、非公開検討会への出席を辞退する旨伝えた。ロートマン、И・И・スミルノーフも同様の行動にでた。ジミーンの招待者の一人（世界文学研究所のЮ・Г・オクスマン―プーシキンやデカブリスト研究で知られる。三〇―四〇年代に弾圧を受け、КГБの監視下にあった。のち研究所を追われる）はジミーンの印刷された著作も送られず、会の日程も知らされず参加できなかった。ジミーンは冒頭で自己の見解を説明する機会を与えられず、これを不服として出席そのものをとりやめる決意をしたが、途中から出席することにした。

出席者は二三〇人以上となった。もちろん多くは批判者であった（О・В・トゥヴォーロゴフは五〇人の出席、うち半分はジミーンの

招待者とする。討論に参加した「専門家」に限定してのことのようだが、それでは他の人々は一体何であったのであろうか。Энциклопедия «Слова о полку Игореве», т.2, СПб.1995, с.222)。講堂の扉の前には若い人々がたち、入場者の氏名をチェックし、世界的東方学・比較文化学者、アカデミー会員Н・И・コンラドは、ジューコフが到着するまで、入場できなかった。歴史人類学者М・М・ゲラーシモフは入場を拒否された。歴史研究所研究員の一人は、ジミーンに反対の発言をするなら認めましょう、そうでないならご遠慮願いたい、と言われたという。

全部で三二人が登壇し発言した。文献学者、歴史家、言語学者、考古学者などである。ジミーンの見解に部分的にでも賛意を表明したのは、ルリエー、В・Б・ヴィリンバーホフ、А・И・クリバーノフ、А・Т・ニコラエヴァ、コブリン、А・Л・モンガイト、В・Л・ヤーニンらであった。リハチョフ、ルイバコーフ、А・В・アルツィホーフスキー、アドリアノーヴァ＝ペレッツ、Ф・П・フィーリン、トゥヴォーロゴフ、Л・А・ドミトリエフ、В・Д・クジミンらが反対した。歴史家のチェレプニーン、А・Н・ナソーノフ、А・А・プレオブラジェンスキーらも出席していたが、発言はしなかった。歴史研究所からは二人だけが発言した。クリバーノフが賛成、В・А・クーチキンが反対の立場からである。

最も積極的に発言したのは、第一日目がリハチョフで、二時間半、第二日目がルィバコーフであった。[5] 作家のВ・И・ステルレツキー（『物語』の現代語訳者、しかしその訳が十分に学問的基盤に立つものとは考えられない）などは政治的非難に終始した。アルツィホーフスキーのたしなめるのも意に介せず、かれはジミーンの見解をシオニスト陰謀と結びつけて非難したという。ルィバコーフも後になってのことだが、ジミーンを支持するのはクリバーノフやヴィリンバーホフ、モンガイト、コブリン、ルリエー（おそらくすべて、少なくとも四人はユダヤ人である）だけだと決めつけている（Вопросы литературы, 1967,3,с.154)。もちろんこれはあたっていない。ヤーニン、ニコラエヴァなどもジミーンを支持していたのであるから。

たしかに良心的な学者の多くは、ジミーンの主張そのものには反対しつつも、その本の出版には賛成した。しかしこの会は結局のところジミーンの名誉を失墜させる方向に導くように仕組まれていたことは否定できない。ジミーンが会の最後に批判にたいする答弁を終えた後、ジューコフは、ジミーンがその根拠のない人騒がせな見解で多くの真面目な学者の貴重な時間を浪費させたと叱責して会を終えた。ジューコフやフヴォストフらはすでに検討会に先立って、ジミーンは一六世紀の専門家としてはすぐれているが、一二世紀に関しては素人で何一つみるべき業績をあげていない、とする非難を繰り返していたという。すでに前節でみたように、この非難には全く根拠がない（キエフ・ルーシ期に関する膨大な史料研究、『ロシア法記念碑』第一巻はルースカヤ・プラウダ等キエフ期の史料刊行、その他様々なテクストの批判、刊行、年代記研究等々の存在)。

六月二六日、党中央委員会学術部門委員А・Н・ソフィースキーはジューコフに、参加者に配付されていた印刷物の回収を提案する。回

収に応じなかった者もいたかもしれないが、大部分の者は応じたという。（これについてはコブリンが自らの体験を記している。かれは事前に回収の件を知って、最終日に持参するのを「忘れた」。つまり提出しなかったのである。だがその後ほぼ一年間にわたって歴史研究所から再三催促の電話があり、返却を要求されることになった。しかしかれは何とか言い逃れ、結局提出を免れたという。[6]）ジミーンのロータプリント版著書は図書館に配備されることもなかった。八月一五日ジミーンの大学時代の知人で党中央委員会イデオロギー委員会議長代理И・И・ウダリツォフがジミーンに反省文の執筆を勧めるが、ジミーンはこれを拒否する。一〇月一七日歴史部門において、ロータプリント版の何部かをアカデミー・アルヒーフに送ること、本の出版はしないことという決定がなされる。

『歴史の諸問題』誌一九六四年九月号に無署名論文「『イーゴリ遠征物語』の成立年代に関するある構想の審議」が現る。[7]これはジミーンの見解（「ある構想」）の一見客観的な紹介にみえる報告文だが、本質は傾向的である。ジミーン報告が断片的に紹介され、これにたいする厳しい、長大な反論がなされる。ジミーンが大部の本を書いたことやその出版の問題に関しては言及されていない。ジミーンの意見を聴くこともなく書かれている。（フォルモーゾフは著者をトゥヴォーロゴフ、Б・А・クーチキンと推測している。А・Н・サーハロフも加わっていた可能性があるという。）編集長Б・Г・トルハノーフスキーはテクストの書き直し（修正）を望んだようであるが、ジューコフが（上の方［党中央委員会イデオロギー委員会か］の承認を得ていると いって）これを制止し、そのままの形で掲載されたという。[8]

一九六四年一〇月一六日フルシチョフがすべてのポストから外され、いわゆる雪解けも終わる。

このころА・マゾンがモスクワを訪問する。ジューコフはジミーンにマゾンと会わぬよう説得。マゾンはジューコフにジミーンの本を見せてくれるよう頼むが拒絶される。マゾンはВ・В・ヴィノグラードフに頼む。後者はフェドセーエフに取り次ぎ、その結果条件付きで、すなわちマゾンはジミーンの本について書いたり、引用したりしないという条件で認められる。

六四年一一月二一日『イズヴェスチヤ』誌にルィバコーフ論文「あるディスカッションをめぐって」По поводу одной дискуссии が載る。『歴史の諸問題』誌より激しい調子でジミーンの公表（を許可）されていない著作を批判。これにたいし多くの読者がこのようなやり方にたいする抗議文を同誌へ送る。同誌プロパガンダ部門責任者の回答は特徴的である。それによれば、『物語』の問題は学問のではなく、政治の問題であり、敵に中傷の材料を与えることはナンセンスだという。[9]また一九六五年一月一八日付け同誌にはБ・Ф・ポルシュネフの、未公刊著書にたいする批判は学問的規範に反するという文章がのる。同誌はそれへの反論文を準備し、アルツィホーフスキーとリハチョフに署名を要請するが、両者はこれを拒否する。[10]

六五年一月五日ジミーンはジューコフに書簡を送り、検討会ででた意見を考慮にいれて著書を完成させたので、出版の準備は整っていると、伝えるが、返事はえられなかった。

一九六六〜一九七〇年ジミーンはその著書のいくつかの断片を発表することができる（通常それらにはいわば狭義の専門家による批判論文が付されている[11]）。しかしジミーンの『物語』研究はその後も続けられ、かれが残した原稿は最初のもののほとんど二倍に増え、内容にも大きな変化がみられるようになっていると伝えられるにもかかわらず[12]、生前はおろかいまだに日の目を見ていない。

その間リハチョフやルィバコーフも『物語』研究を進め、とくに後者はその後三冊の著書を上梓している[13]。かれらはジミーンの主張、論拠、方法論、かれが集めた資料を実際には用い、あるいは念頭におきながらも、ジミーンの名には触れずに自説を主張し続けているという。

(四)　異論派ジミーン

ジミーンへの非難、さらし刑 пельмование はその後も続いた。フヴォストフは（一九六六年九月二五日付け『プラウダ』で）ジミーンのことを虚無主義者と呼んだ（「わが学問におけるニヒリズム」）。カザンの学者たちは、ジミーンの研究は「イデオロギー的破壊活動」であると説明された。ジミーンは「西欧シオニスト・グループの要請」であのような見解を発表したのだという中傷も相ついだ。

ジミーンはその後研究所の主任研究員のままに留め置かれた。研究者としての境遇は疑いもなく悪化した。アカデミー古文献学委員会議長代行職からは外された。考古学研究所学術ソヴェト委員、ついで歴史研究所の同委員の役職も奪われた。外国からの招待（ハーヴァード、ソルボンヌ、西ベルリン）を受ける許可もでなかった（かれが外国に出たのは一度だけ、一九六〇年東ドイツへのことであった）。一九七二年にはМГИАИでの教育活動から退くが、これも強いられたものであった可能性がある。

ジミーンは自己の『物語』研究を「学者の思想の自由の権利」のための、「四〇—五〇年代に盛んになった官製偽愛国主義」に対する闘いと認識するようになっていた。かれによれば、「『物語』をめぐる歴史は……我が国における古代学者たちの『純粋科学［学問］』が神話であることを暴露した。」また「純粋に学問的な問題が道徳と密接にからみあっている」と言う。ジミーン自身にとって『物語』をめぐる出来事は「その後の人生の全行路を決定した栄光の瞬間」であった。『物語』研究に携わった後にはかれは「精神的自由の爽快な空気を感じるようになった」という。それはかれが「学術労働者から歴史家へと変貌する」ことを可能ならしめたという[14]。かれのそれ以後の、とくに晩年における夥しい数の著書・論文の執筆、その歴史観・研究手法の変化、つまり研究的営為の全軌跡は、『物語』をめぐる以上のような経過を考慮に入れて初めて理解しうるものであろう。

注

（1）以下の記述に関しては、Зимин, «Слово о полку Игореве» и его Формозов の解説（c.96-103）、また *Кобрин, Кому ты опасен, историк ?*, c.177-180 さらに *Советская историография*, c.246-248（Ю.А.Лимонов の執筆）、それにフェンネルの二点 Fennell, Recent Controversy ; Fennell and Stokes, *Early Russian Literature*, Ch.4 (pp.191-206, "The Tale of Igor's Campaign") また Кашгаров/Чернобаев（前掲注一の(2)）に多くを依存している。コブリンはジミーンの見解発表をめぐる当時の学界の雰囲気をよく伝えているが、ジミーンの自説の発表とそれをめぐる学

界の対応等に関する諸事実、事態の推移について本稿は、なかでも主にフォルモーゾフの解説に依拠している。フォルモーゾフの解説文が客観的であるかどうか明確には判断がつかない。それはソヴェト崩壊後の時流に乗ってやや「暴露的、摘発的」な調子を帯びているようにもみえるが、今のところ筆者にはその客観性をチェックする手段が他にない。また以下の記述において筆者が、ジミーン説の是非についての学術的検討を意図しているわけではないことをここで断っておきたい。『物語』のテクストをめぐる検討はそれにふさわしい研究者によって、しかるべき手続きをへたうえでなされるべきであると考えるからである。ここではまたジミーンとその批判者の『物語』に関わる多岐にわたる論点について紹介する意図ももっていない（この点については、以下本文において ふれる一九六四年五月のジミーン説をめぐる検討会後の『歴史の諸問題』誌上にのった報告文 Обсуждение одной концепции о времени создания《Слова о полку Игореве》, *ВИ*., 1964-9,c.121-140 や Энциклопедия《Слова о полку Игореве》, т.2, СПб.1995,c.222-225 におけるO・B・トゥヴォーロゴフの文章が参考となるが、前者はかなり詳しくジミーンの説を伝えているのではあるが、後述するようにジミーン説を論駁することを主目的としているし、後者も著者ははっきりとジミーンに批判的な立場に立ち、その具体的な「事実」の記述や記述の調子には疑問を抱かせる部分がある。これにたいし本注にあげたフェンネルの文献はジミーン説をより客観的な立場から比較的詳しく紹介し、検討している。フェンネルは『物語』の真作性を主張する側とそれを否定するジミーンとのどちらが正しいかについての判断は留保している。ただかれはStokesとの共著の上記「古ルーシ」文学史の概説のなかで、『物語』をキエフ時代の作品として扱うのではなく、独立の章をもうけて、しかも真贋論争に立ち入って解説するという取り扱いを行っている。ジミーンの研究にたいし好意的とまではいえないにせよ、ソヴェトの研究者たちよりは学問的な態度をもって相対しているといえる)。ここではジミーンの見解の表明がどのように扱われ、現在どのような状況にあるかについて限定された文献からたどることを唯一の目的としている。

(2) ジミーンは一九六三年一月のJ・フェンネルへの書簡で、『物語』研究に没頭していること、それはかれのすべての時間を奪うものであろうこと、まだ結論には至っていないが、思いがけない、非正統的なものになる可能性があることを伝えているという。(Waugh, 'Zimin's Study, p.47,58による)

(3) ジミーンが拒否したためチホミーロフの論文もこのときは発表されず、それはかれの死後かれの論文集のなかに含められた。M.H.Тихомиров, Замечания на тезисы доклада А.А.Зимина, в его:*Русская культура X-XVIII вв.*M.,1968.c.416-421.なおかれはこれとは別に一九六三年八月一一一七日付けの週刊誌Неделяにやはりジミーンの見解を論駁する論文(同上論文集に含められる。M.H.Тихомиров, Вещие струны русской поэзии, Там же, c.64-69) を乗せたが、この論文ではなぜか上の報告会のことには触れられず、ジミーンの名前もだされずじまいであった。チホミーロフが『物語』を一二世紀の作品と考えていたことは確かであるが、このような形でジミーンを批判することになったのは、おそらく「上」からの要請もあってのことであろう。チホミーロフがジミーンを非学問的な形で批判することに疑問を抱いていたであろうことは、後述するところからも推測できる。

(4) その成果の一つがД.С.Лихачев и Л.А.Дмитриев(ред.), *《Слово о полку Игореве》и памятники Куликовского цикла*, М.-Л., 1966である。

(5) ここでこの二人の指導的学者（分野は異なるが）について一言しておきたい。すなわち筆者の考えでは、リハチョフとルィバコーフの二人は同日には論じられない。前者の人格、識見、とりわけ文献学への造詣の深さは疑いない。かれは検討会の公開を最後まで主張したという。ルィバコーフも有能で多産、該博な知識をもった考古学者、古代・中世史学者で、種々の分野で貴重な学術的貢献をなしてきたのであるが（そしてこの時点ですでにアカデミー会員となっている)、その史料操作、というより史料の利用方法—歴史家の基本である—の面で、またその高圧的

でプリミティヴな愛国主義的・排外主義的態度には問題があると考えている。筆者はこの点については、たとえばルリエーの立場に賛成である。かれはルィバコーフがかつてЛ・Н・グミリョフ（その独特な民族起源論にもとずき独創的なロシア史論を展開した）を批判した際の手法・態度が、学問的でないことを冷静に指摘したのである。 см.Я.С.Лурье, *К истории одной дискуссии*, *ИСССР*,1990-4, c.128-133 ; Его же, *Россия Древняя и Россия Новая*, c.44-55.（グミリョフについてはさしあたり拙稿「L・N・グミリョフのエトノス史論とロシア」、『民族と国家の文明史的研究』（財団法人・地球産業文化研究所、一九九四年）十五―二三頁を参照。）またジミーン自身もルィバコーフの研究法には穏やかな言い回しながら疑義を表明している（たとえば、Зимин, Трудные вопросы, c.440-441）。ここではまたレニングラードの歴史家И・Я・フロヤーノフのキエフ・ルーシ社会に関する非正統的見解の表明にたいするルィバコーフの抑圧的態度も思い出される。（これにたいし同じくフロヤーノフ説を批判したチェレプニーンの抑制のきいた態度―かれはフロヤーノフの博士号獲得試験の際に公式的討論者の役割を引き受け、しかも博士号の授与の提案には賛成したという―も想起される。）これについては、Кобрин, *Кому ты опасен, историк ?*, c.180-183をみよ。ルィバコーフの研究に関しては早くからその問題性が指摘されてきたが（たとえば五〇年代の「反コスモポリティズム闘争」との関連でのそのハザール研究にたいするМ・И・アルタモーノフの批判、その後の極端で攻撃的な反ノルマニスト的立場からの「ルーシ」研究―「ルーシ」南方起源説、古ルーシ国家形成に際してのノヴゴロドの役割の軽視、キー伝説の根拠なき重視［キーを六世紀の実在の人物で古ルーシ国家の創設者とする］―にたいする多くの研究者の懐疑の表明、またスラヴの起源を紀元前二千年紀の中頃まで遡らせようとする姿勢、その際のヘロドトス「理解」にたいするА・И・テレノーシュキンらからの反論、ブィリーナを直接的な歴史史料として使用しようとする志向にたいするВ・Я・ポッペやБ・Н・プチーロフらの批判、いわゆる「タチーシチェフ情報」にたいする過度の信頼・依存への諸史家からの疑義の表明など）、それらは個別的散発的に留まり、その上かれのアカデミー会員としての権威が大きかったからであろうか、七〇年代半ばからは公然たる批判は影を潜めたように思われる。それが八〇年代も後半になってかれが八〇歳（！）を迎えるようになったころから、批判が大きくなり始め（たとえば、一九八八年三月の『歴史の諸問題』誌上の「ラウンドテーブル」では、フロヤーノフ、В・Д・ナザーロフ、就中、А・П・ノヴォセーリツェフが名指しでルィバコーフを批判している、см. *ВИ*, 1988-3, c.14,29-30,49）、ついには一九九三年にはルィバコーフの研究の問題点を鋭く、具体的全面的に批判する論文も現れるようになった（см.А.П.Новосельцев,《Мир истории》или *миф истории ?*, *ВИ*,1993-1,c.23-31）。またわが国でも最近ルィバコーフの史料利用法の問題性を指摘する論考が現れた（宮野裕「中世ロシアの『《異端》ストリゴーリニキの新史料』」（『北大史学』三九、一九九九年、一〇〇―一一一頁）。同論考は、ルィバコーフがストリゴーリニキ研究の「新史料」として導入した三点の史料が、実際には利用できないものであることを論じている。ルィバコーフにかつて上述の様な権威を与えることとなった直接の契機は、古ルーシに西欧諸国に劣らぬほどに発達した手工業が存在したことを主張した大著（『古ルーシの手工業』一九四八年、翌年スターリン賞を受賞した）の出版であったと考えられるが、この著作の内容については、拙稿「ロシア中世都市における手工業と手工業者（I）、（II）」、『商学討究』（小樽商大）、三一（一九八〇年、四〇―六六頁）、三三（一九八三年、四三―六八頁）を参照。またフロヤーノフの所説とそれをめぐるソヴェト史学界における論争については、さしあたりT. Kuryuzawa, The Debate on the Genesis of Russian Feudalism in recent Soviet Historiography, in: T.Ito (ed.), *Facing Up to the Past*, Sapporo,1989,pp.111-147を参照。そこでも指摘したが（p.143）、ペレストロイカの進行もあってソヴェト史学界内部に、フロヤーノフに自説を弁護できる機会を保証することを求める声が上がるようになっていた（Е・В・アニーシモフ。またノヴォセーリツェフはかつて

の自身のフロヤーノフ批判の仕方が学問的でなかったことについて公に遺憾の意を表明している、см.*ВИ*,1988-3, с.17,29)。

(6) Кобрин, *Кому ты опасен, историк ?*, с.179

(7) Обсуждение одной концепции（本節注(1)を参照）

(8) コブリンは『歴史の諸問題』誌のこの報告文の不当性に抗議する書簡を編集部に送ったが、返事はなかったという。Кобрин, *Кому ты опасен, историк ?*, с.180

(9) このような抗議の書簡を送った一人が歴史家のパネヤフで、かれはそのときのことについて後に『歴史の諸問題』誌に書いている（一九九〇年)。かれは当時『イズヴェスチヤ』からかれのもとに送られてきた返書を引用し、同誌の学術研究にたいするイデオロギー的抑圧的態度を暴露するとともに、今こそジミーンの『物語』研究（それは死の間際まで続けられ、先のロータプリント版より大部に、また内容も大きく異なるものになっているという)を出版すべきであると訴えている。В.М.Панеях, Об издании научного наследия А.А.Зимина, *ВИ*,1990-9,с.187-188

(10) この問題は今日にいたるまで変らずに続いている。А.А.Горский,《Слово о полку Игореве》и《Задонщина》. Источниковедческие и историко-культурные проблемы. М.,1992にたいする *ОИ*,1995-1,с.190-192に乗ったЛ.В.Милов の書評をみよ。キエフ時代から一九世紀にまでおよぶ農業史を中心とする幅広い研究で知られる（最近も大著『大ロシアの耕作者とロシアの歴史過程の特殊性』一九九八年を出版した）ロシア科学アカデミー準会員ミロフは、ジミーンの「センセーショナルな行動」以来、かれの見解を支持する「少しでも詳細な客観的な研究」は一つも現れなかったといい、これにたいし、かれの説を論駁し、『物語』の真作性を証明する研究のみが現れている（そしてゴールスキーの新著もその一環である）として、あたかもジミーンの研究が学界で否定されたことを既成事実であるかのように記すが、かれは、ジミーンの研究が三〇年もたった当時もなお出版されていないことを忘れているかのようである。ミロフの書評からは、かつて公刊を許されず、現在も（もはや政治的理由がなくなった現在では、あるいは経済的理由、あるいはイデオロギー的・国民感情的理由からかもしれないが、いずれにせよ）広く世に問うことが困難な状況にある研究を叩いて喜んでいるという印象を受ける。ミロフの立場を先にふれたルィバコーフと同様に論ずることははばかられるが、それでもソヴェト（そして解体後、それを引き継いだロシア）史学界内部には非正統的研究者とその見解にたいする必ずしも十分に学問的とはいえない批判の態度がみられるようにみえる。ただここで一つ留意すべきなのは、第一にソヴェト史学界においても、当然のことながら、決して全ての者が同じように非学問的・政治的であったわけではないこと、第二に学問的な論争の難しさというのはソヴェトだけに限られるものではないということである。後者の点に関し、Waughはジミーンとの間にあった体験を次のように記している。すなわちジミーンはアメリカ合衆国の著名な言語学者でスラヴ学者でもあるR・ヤコブソンがかれの見解を批判するやり方に憤慨していたというのである。Waughによれば、この碩学はジミーンの非公式にしか印刷されなかった研究をとりあげ、ジミーンに悪口を浴びせかけながら一頁一頁ごとに度を超えた批判を書きつらね、それを自身の選集の末尾に急いで押し込んだという(see,R.Jakobson,*Selected Writings*, IV, The Hague/Paris, 1966, pp.656-704)。Waughによれば、ジミーンは論争に際して、相手の主張の論拠との真剣な対峙を心がけ、相手を罵るようなことは注意深く避けていたという。またこれとの関連でWaughは次のようなエピソードをも伝えている。一九七一年末かれがジミーンに会った際、ジミーンはアメリカで出たばかりのE.Keenanの著書（『イヴァン雷帝とクールプスキー公との往復書簡』の偽作説を唱えた、*The Kurbskii-Groznyi Apocrypha*, Cambridge, Mass.,1971）について、キーナンの試みを高く評価しつつも、その説が抱える問題性を丁寧に指摘し、それをキーナンに伝えて欲しいと頼んだという。Waughはジミーンこそがソヴェトで最も早くキーナン批判の文章を発表する人物の一人であろうと考えたが、案に相違してジミーンはしばらくその見解の公表は控えていたという。（その理由

についてWaughは興味深い推測をしているが、ここではふれない。）ジミーンは五年ほどしてから自身のキーナン批判の文章を三度にわたって公けにしたが、それらは往復書簡（とりわけクールプスキー第一書簡）の写本とテクストに関する真に内容のある学術的貢献であったという。Waugh, Zimin's Study,pp.45-46. キーナンの書についてはさしあたり、拙訳「イヴァン雷帝とクールプスキー公の往復書簡試訳（1）」『人文研究』（小樽商大）、72（1986）の解説文（112-113頁）を参照。

(11) コブリン（*ИЗ*,т.105,с.305-306,прим.7）に一〇本のタイトルが紹介されている。

(12) ジミーンの『物語』研究は一九七六年時点には一二五〇頁になっていたとフォルモーゾフは伝えている（*ВИ*,1992-6/7,с.102）。（J.Afferica のジミーン業績リストでは、没後に残されたのは二分冊で計一二〇〇頁であったという。*Essays in Honor of Zimin*,p.87）。ジミーンはこの研究と並行して、その間の事情を記した日記『言葉と行為』*Слово и дело. Страницы дневника 1963-1977*をも執筆していたという。

(13) Д.С.Лихачев,《*Слово о полку Игореве*》*и культура его времени*. Л., 1978;Е.А.Рыбаков,《*Слово о полку Игореве*》*и его современники*,М., 1971;Его же,*Русские летописцы и автор*《*Слова о полку Игореве*》, М., 1972; Его же, *Петр Бориславич.Поиск автора*《*Слова о полку Игореве*》, М.,1991

(14) パネヤフによる（Панеях, Панорама истории России ,с.77-78）。なお、カシターノフ、チェルノバーエフはそのジミーン論のなかで、ジミーンが苦境のなかで引続き研究を続けられたことの背景を論じているが、それによると、ソ連邦史研究所の同僚のなかにかれの見解を支持する者（クリバーノフら）がいただけでなく、かれの研究者としての才能を高く評価し、理解を示す者も多かったこと（チェレプニーン、パシュートら）、また一九六四年は一九三七年ではなかったこと（つまりスターリン期の厳しい状況はすでに過去のものとなっていたこと）が大きいという。ただしこれはあくまでも背景である。

四　ソヴェト中世史学におけるジミーン
——結びに代えて

ジミーンの業績と学者としての軌跡はほぼ以上に記したとおりである。かれは後世の歴史研究者に何を残したのであろうか。というより我々はかれをどう読もうとするのであろうか。かれの歴史研究者としての営為から浮かんでくるものをあえてまとめてみれば、以下のようになろう。

歴史研究における「事実」の復権。前提的・先入見的理論・図式・ドグマの拒否。歴史家・学者の良心、すなわち権威からの自立性の主張と実践。権力への恐れの克服。学問への献身。教育（後進の育成）への情熱。熱情的論争家（『物語』をめぐる論争はもとより、またすでにふれた人々とのほかに、文学者Р・Н・ドミトリエヴァ、歴史家С・О・シュミットらとの論争など、かれは常に論争していた感じがする）……

おそらく以上のような点を列挙しただけでは、歴史家としてのジミーンの生きた存在は十分には表現されないであろう。しかしここではこれ以上に望むことはやめて、これらからですらただちに感じ取られる一つの点に最後にふれておこう。すなわち、ジミーンには中世のロシア史（モスクワ史）に関して何か包括的理論あるいは構想というものが欠けているのではなかろうかという点である。実際すでに記したように、ジミーンは晩年にはソヴェト中世史学に特徴的にみられた多くのシェーマ、また用語を拒否し、個々の歴史的事実の発見・確定に全

力を注いでいたようにみえるのである。確かにかれはそれらの「事実」を統合する理論、ないし新たなシェーマを提唱することはなかった。かれはモスクワ国家の集権化の道が単純なものではなく、紆余曲折の末に徐々にやっとのことでなされたことを証明すること（モスクワ国家は、多くの研究者や為政者そして普通の人々が望み、願ったような誇るべき強力な中央集権国家であったのではなく、困難で複雑な経緯をへて歩み続けた問題の多い現実的な存在にすぎなかったということの証明）に全力を傾注して、それ以上のことはなさなかったようにみえる。はたしてかれには歴史事実の総合という志向はなかったのであろうか。

筆者の見解を結論的に記せば、必ずしもないわけではなかった。かれは一九七八年夏の終わりから一九七九年三月初めまでクリミアのフォロスで療養している（かれは晩年病床にあった。進行性の呼吸器疾患、肺病であったと伝えられる。かれは学生時代結核を患っており、「白いキップ」を得て兵役を免れていたことがあるが、晩年の病気もそれと関係があるかもしれない）。そのとき出発に先立ってかれはフォロスで何をなすべきか（「もし神が生かし続けてくれるなら」）考えたとき、最初はヴァシーリー二世時代の研究に従事しようと考えた。しかし膨大な書物を抱えてゆくことができないというので、それは断念した。（それは結局モスクワに戻ってから着手され、最後の著書『岐路に立つ勇者』全二部となって残された。その第一部は既述の如く一九九一年に出版された。第二部［『便覧』Справочник］は未刊である。［Зимин,Витязь на распутье の編者によれば、一九九一年段階でソ連邦史研究所でロータプリント版を準備中とあるが、カシターノフらによれば九〇年代末現在まだ出ていない。］）次に、マルク・ブロックについて（歴史全般について）本を書こうと思う。これならば、本はほとんど必要ない……しかし自分にそれだけの力（おそらく能力という意味ではなく、健康また体力のこと）があるだろうかと考え、これも断念する。そこで選択したのが『ルースカヤ・プラウダ』研究であった。[1]（これも膨大な本が必要ではないかと思われるが、おそらくそれまですでに研究し、書いていたものをまとめる仕事であったのであろう。その成果は、既述の如く、没後の一九九九年に刊行された。）いずれにせよ、マルク・ブロックについて、歴史一般について書こうという意志があったということは、かれが必ずしも歴史を広い目でみようという志向と無縁であったわけではないことを示している。ただ実際にはかれにそのような仕事はほとんどない。おそらくかれにとって最も重要な（あるいは余儀なくされた）課題は、ソヴェト史学とかれ自身を圧倒的な力で支配していた「構想」、シェーマ、それに基づく公式的歴史像の打破・破壊、そしてまた思い通りの研究活動を抑制し、権威にたいし媚びることを助長する精神的文化的環境への抵抗であった。晩年におけるかれの全神経、努力はその実行にあったと考えられる。人間は、そして歴史家も、アプリオリに、無前提的に歴史を捉えることはできない。しかしいかなる前提の上に立つべきか、いかなる構想のもとに混沌とした事実の大海に分け入るべきか、その答えをかれは後世の歴史家に委ねたといえるかもしれない。ソヴェト中世史学が抱えていた問題はかれにとって次への当然のステップを許さないほ

どに大きかったともいえよう。

もう一点、付け加えておくべきことがある。以上のように、ジミーンはソヴェト的「構想」の打破に苦闘しながら、何らかの意味での理論的枠組の必要性はもちろん認識していた。かれは歴史研究における仮説と推測、また憶測の峻別を説き、仮説の重要性について記している。それは絶えず事実によって検証されなければならないものであるが、それなくしては歴史研究はできない。[2] 一方かれがその生涯を通じて行ったことは、この仮説（にすぎないもの）を、あたかも絶対的真実であるかのように考え、それを具体的現実に適用し、現実を生きた現実としてではなく静止し固定化された実体としてとらえる傾向にたいし異議を唱えることであった。ソヴェトにおけるこの傾向はまた、この仮説を絶対化するだけでなく、すべての者が従うべき真実であるとして強制することにつながっていた。それは政治権力にとっても必要かつ重要なことであり、ソヴェトでは学問と政治はイデオロギー闘争遂行の目的のために緊密に結ばれていた。（こう記したからといって、逆に学問と政治が関係ない、あるいは切り離すべきだと言っているのではない。それは大いに関係がある。しかし学者は学問のうちで議論し相手を説得しなければならない。）ジミーンがおそらく、どこまで意識し覚悟していたかは不明であるが、行った最大のこと、結果的に最も精力を注ぐことになったのは、研究とともにこの強制の圧力との闘いであったといえるかもしれない。どのような「真実」であれ、それを「現実」と人に押し付け強制することはできないという単純な事柄を求めたのだといえる。

ジミーンの研究、生き方から時代を解き明かす何か出来合いの構想やドラスチックに後世のためになる教訓を引きだすということはできまい。混迷する近未来（二一世紀などと軽々しく言うのは慎みたい）に対する見通しをかれに期待することはできないかもしれない。置かれた状況の中で誠実に自己の学問的良心に従って歩んだ一人の歴史家の後ろ姿を静かに見つめることができるだけであるように思う。

注

(1) Зимин, *Правда Русская*, с.388（В・Г・ジミーナ、А・С・オレシュニコフ、А・Л・ホロシュケーヴィチらによる Послесловие）

(2) Зимин, Трудные вопросы методики,с.439-442

文　献　表

В.И.Буганов, А.А.Зимин о социальных движениях в феодальной России. ОИ,1995-4, с.153-158

А.А.Зимин, *И.С.Пересветов и его современники*, Изд.АНСССР, М.,1958

---　*Методика издания древнерусских актов*, ротапринт, М.(МГИАИ),1959

---　*Реформы Ивана Грозного,Очерки социально-экономической и политической истории России середины XVI в.* Изд. Социально-Экономической Литературы, М.,1960

---　《*Слово о полку Игореве*》.*Источники.Время создания.Автор*, 3 кн.ротапринт, М.,Ин-т истории АН СССР, 1963

--- *Опричнина Ивана Грозного,* Изд.Социально-Экономической Литературы.«Мысль»,М.,1964

--- Трудные вопросы методики источниковедения Древней Руси, в.:С.О.Шмидт(ответ.ред.),*Источниковедение,*М.1969,с.427-449

--- *Россия на пороге нового времени, Очерки политической истории России первой трети ХУ1 в.* Мысль, М.,1972

--- *Холопы на Руси с древнейших времен до конца ХУ в.* Наука, М.,1973

--- О методике изучения древнерусского летописания, *Изв.АН СССР,серия литературы и языка,* ХХХ111-5(1974). с.454-464

--- *Крупная феодальная вотчина и социально-политическая борьба в России (конец ХУ-ХУ1 в.)* Наука,М.,1977

--- *Государственный архив России XVI столетия. Опыт реконструкции.* [3 кн], ротапринт, М.,1978, Ин-т истории СССР АНСССР,Подгот. текста и коммент.

--- *《Задонщина》.Древнерусская песня. Повесть о куликовской битве,* Тула.1980

--- *Россия на рубеже ХУ-ХУ1 столетий, Очерки социально-политической истории,* Мысль,1982

А.А.Зимин и А.Л.Хорошкевич, *Россия времени Ивана Грозного,* Наука,М.,1982

А.А.Зимин, *В канун грозных потрясений, Предпосылки первой крестьянской войны в России,* Мысль, М.,1986

--- *Формирование боярской аристократии в России во второй половине ХУ-первой трети ХУ1 в.*, Наука, М.,1988

--- *Витязь на распутье, Феодальная война в России ХУ в.,*Мысль, М.,1991

--- *Правда Русская,* Изд. Древлехранилище, М.,1999

--- «Слово о полку Игореве»(фрагменты книги), *ВИ,*1992-6/7, с. 96-115

Историки России. Послевоенное поколение, М.,2000

*Историки России XVIII-XX веков,*Вып.5-й,М.,1998

Книга ключей и Долговая книга Иосифо-Волоколамского монастыря ХУ1 века, Ред.А.А.Зимин,совместно с М.Н.Тихомировым, М.1948

В.Б.Кобрин, Власть и собственность в средневековой России (ХУ-ХУ1 вв.), М.,1985

--- *Кому ты опасен, историк ?,* М.,1992

Я.С.Лурье, Об А.А.Зимине- источниковеде и текстологе, *ВИД,* Х111(1982), с.329-331

--- *Россия Древняя и Россия Новая (Избранное),*С-Петербург,1997

--- *Русь ХУ века:отражение в раннем и независимом летописании, ВИ,*1993-11/12,с.3-17

В.М.Панеях, Вспомогательные исторические дисциплины в научном наследии А.А.Зимина, *ВИД,* Х1У(1983),с.107-135

--- Панорама истории России ХУ-ХУ1 веков А.А.Зимина- К

выходу в свет книги *《Витязь на Распутье》, ОИ*,1992-6,с.70-81

Россия на путях централизации, Сб.статей, Наука М.,1982

П.А.Садиков, *Очерки по истории Опричнины*, М.-Л.,1950

Советская историография Киевской Руси, В.В.Мавродин(ответ.ред.), Л.,1978

Советское источниковедение Киевской Руси. Историографические очерки,В.В.Мавродин (ответ.ред.),Л.,1979

Спорные вопросы отечественной истории X1-XУ111 веков, Тезисы , доклады и сообщения Первых чтении, посвященных памяти А.А.Зимина, Ч.1-2, М.,1990

А.Л.Хорошкевич, Опричнина и характер русского государства в советской историографии 20-х--середины 50-х годов, *ИСССР*, 1991-6,с.85-100

Л.В.Черепнин, *Образование Русского централизованного государства в X1У-XУ веках*, М.,1960

А.Л.Юрганов,Творческие наследие В.Б.Кобрина в контексте истории исторической науки, *ОИ*, 1993-1,с.136-149

Essays in Honor of A.A.Zimin, ed. by D.C.Waugh, Slavica Publishers Inc., Columbus, Ohio,1985

J. L. I.Fennell, The Recent Controversy in the Soviet Union over the Authenticity of the SLOVO, in:L.H.Letgers(ed).*Russia.Essays in History and Literature* , Leiden,1972,pp.1-17

J.Fennell and A.Stokes, *Early Russian Literature*, London,1974

（なお本稿では下記の定期刊行物の表記に際し次のような略称を用いた。

Археографический ежегодник---АЕ;Вопросы истории---ВИ;Вспомогательные исторические дисциплины---ВИД; Исторический Архив---ИА;Исторические записки---ИЗ;История СССР---ИСССР;Отечественная история---ОИ;Проблемы источниковедения---ПИ）

（本稿は二〇〇〇年度ロシア史研究会大会［一〇月二八日、於法政大学］における共通論題「二〇世紀ロシアの歴史家たち」での報告をもとにしている。）